追悼

副會長古市公威男の薨去を悼む

港灣協會長　水野錬太郎

港灣協會副會長工學博士男爵古市公威君は我工學界の長老であつて港灣、河川、道路、鐵道等に貢獻したること極めて大なるものがある。博士は若くして外國に留學し土木工學を修めて歸朝し內務省土木技監となりて日本の土木工學諸般の施設に力を致され、一面又東京帝國大學工科大學長となりて子弟を敎育せられたので、現在朝野樞要の地位にある者も尠なからず、內務省、鐵道省其他民間技術界に頭角を顯はして居るものは皆博士の薰陶を受けた人で我國土木學界の基礎を築いたのである。

博士の關係した港灣、道路、河川、鐵道等其功を收めて居るものは尠なくないが、就中横濱、神戸、東京、新潟及北海道等の諸港灣は直接間接に關係せられて其力に賴るところが極めて多かつた。

博士の官歷からしても內務省土木局長、遞信次官其他を歷任し又第一期貴族院議員に勅選せられ次で樞密顧問官に親任せられ以て今日に及んだので國政に盡した功績も亦偉大なものがある。

殊に港灣協會にとつては其創立以來副會長として終始一貫今日に至り、常に理事會、評議員會等にも出席し會務に盡力せられて居た、又嘗て北海道に於て第三回通常總會の開かるゝや當時自分は外國に旅行中で直接會務を見ることが出來なかつたが、博士は老軀を提げて北海道に赴き總會に臨んで議事を統べられた事は會員の等しく多とした所である。

博士は自分の先輩である、然るに自分の會長たる下に副會長として居られることは誠に氣の毒であると思つて顧問に推戴したい旨を語つたところ、そんな地位の事など頓着せず其儘にして置いて貰ひたいと云ふことで其謙讓な態度には自分は尠なからず敬服した次第

である。

如斯博士は日本の工學界に貢獻した事は勿論我港灣協會今日の隆昌を來たした恩人である、今日博士を失ふことは國家の爲め損失たるのみならず我協會として特に惜しむべき人であつて誠に痛惜に堪へぬ、茲に微衷を披瀝して哀悼の意を表する次第である。（談）

古市副會長薨去

本會副會長工學博士男爵古市公威氏は昭和七年末輕微な腦溢血を起して以來澁谷區常盤松の自邸に於て靜養中一月二十八日薨去せられた。

略歷

氏は姫路藩士古市孝の長男として安政元年に生れ、明治八年佛國に留學し同十三年歸朝後土木局雇、內務、文部各省御用掛、內務技師、帝國大學教授、同學長、內務省土木技監、同土木局長、遞信次官、同總務長官兼官房長、鐵道作業局長官などに歷任し、日露戰役の際京釜鐵道總裁となり、次に韓國統監府鐵道管理局長官に任ぜられた後官途に就くことをやめ工業界に入つた、同二十一年日本最初の工學博士となり同二十三年第一期の議會に貴族院議員に勅選せられ大正八年には勳功により男爵を授けられた、なほ同十三年には樞密顧問官に親任せられ、東京帝國大學名譽教授、帝國學士院會員として土木工學界の權威であり社會、教育、保密顧問官など政治にも椅子についた人であつた、我國の大きな土木事業には大抵直接間接に關係されてゐる、大正十一年本會創立以來副會長の重職にありて會務に盡瘁された。

尙多年の功績を思召され特旨を以て正二位に敍し旭日桐花大授章を加授せられた。

弔賻並に花環

本會は副會長古市公威男の靈前に弔賻並に花環を供へ水野會長より左の弔詞を贈つて哀悼の意を表した。因に葬儀は二月一日青山齋場に於て佛式にて告別式執行。

弔辭

港灣協會副會長工學博士男爵古市公威君病ニ臥シテ起タス遂ニ薨去セラル矣嗚呼哀哉君ハ本會創立以來副會長ノ要職ニ膺リ多年會運ノ隆興ニ裨補セラル、所尠カラザリシガ今ヤ千古ノ別ト爲ル痛惜措ク能ハズ茲ニ本會ヲ代表シテ哀悼ノ詞ヲ陳ベ謹デ弔意ヲ表ス

昭和九年二月一日

港灣協會長　水野錬太郎